令和　６年　３月　１日

福岡県教育委員会教育長　殿

所属校名　宗像市立河東西小学校
職・氏名　教　　諭　安部　優人
指導者名　主幹教諭　井手　　司

研　修　最　終　報　告　書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

記

１　研修種別　　Ｃ　　福岡教育大学附属福岡小学校研修員

２　研修場所及び所在地　　福岡教育大学附属福岡小学校
〒810-0061　福岡市中央区西公園 12 番１号
ＴＥＬ　　（０９２）７４１－４７３１
ＦＡＸ　　（０９２）７４１－４７４４

３　研究主題及び副題

持続可能な社会を構想する第５学年社会科学習
～立場を基に追究することを促す単元構成を通して～

４　研究内容の概要

(1)　主題の意味

持続可能な社会とは、現在だけでなく将来に向けて、環境保全と産業発展の両方を満たしている世の中のことである。

持続可能な社会を構想するとは、環境保全や産業発展に見られる課題を把握し、解決に繋がる学習問題を設定し、現在の取組について追究した上で、仕組みや働きを見いだし、課題解決に向けて社会や自分自身がすべきことを選択・判断し、提案することである（図１）。「社会や自分自身がすべきことを選択・判断する」とは、課題解決に向けて、社会的事象に関わる立場の人々が行うべき取組や自分がすべき取組を選択・判断することである。

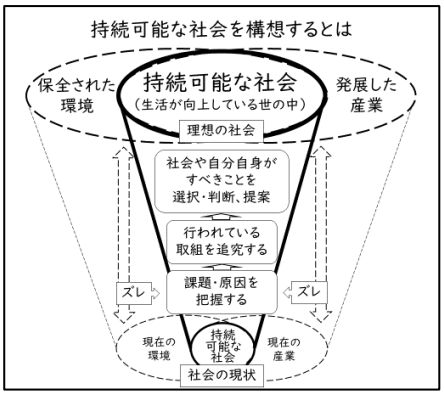


図１　持続可能な社会を構想するとは

持続可能な社会を構想する第５学年社会科学習とは、単元を通して課題解決に向けて、社会や自分がすべきことを選択・判断し、社会的事象に関わる立場に提案する学習である。導入段階では、環境保全や産業発展に関して、理想と現状を比較し、課題を把握して学習問題を設定した上で、学習計画を立てる。展開段階では、課題解決に関わる人々の取組を追究し、各立場の関係や国民生活との関連を踏まえて、社会的事象の仕組みや働きを見いだす。終末段階では、課題解決に取り組む立場から多角的に考え、課題解決に向けて社会や自分がすべきことを選択・判断した上で社会的事象に関わる人物に提案していく。ここでは、持続可能な社会を構想する子供像を以下のように定義する。

○　環境保全や産業発展における課題や原因を把握し、持続可能な社会を構想するための学習問題を設定することができる子供　（問題設定力）
○　国民生活と関わる社会的事象（産業）の仕組みや働きを見いだすことができる子供　（追究力）
○　持続可能な社会に向けて、環境保全と産業発展の両方を満たすために有効だと考える取組と推進する立場を選択・判断し、提案することができる子供　（意思決定力）

(2) 副題の意味

立場を基に追究するとは、課題解決に関わる立場の取組を調べ、各立場の関係や国民生活との関連を明らかにすることである。

立場を基に追究することを促す単元構成とは、各立場の社会的事象への関わり方を明らかにしていく活動を位置付けることで、それぞれの立場での取組が関係し合い、今後どのような取組を行うべきかを考えることを促す単元構成のことである。主に導入段階では「問題設定力」、展開段階では「追究力」、終末段階では「意思決定力」の育成をねらいとしている(図２)。

導入段階では社会的事象の理想と現状を比較し、課題や原因を把握した上で、課題解決に繋がる学習問題を設定する。次に、展開段階では、課題の解決に向けて社会的事象に関わる立場が営んでいる取組の内容を調べる。調べた内容を基に、各立場の関係を図にまとめ、繰り返し付加、修正していくようにすることで、調べた立場、取組と国民生活を関連付けたり総合したりして、社会的事象の仕組みや働きを見いだしていく。終末段階では、社会に見られる課題を解決するために、有効だと考える取組を選択・判断、提案することができるようにする。このように社会的事象に直接関わる立場のすべきことや自分の立場ですべきことを選択・判断し、提案することを目指す。

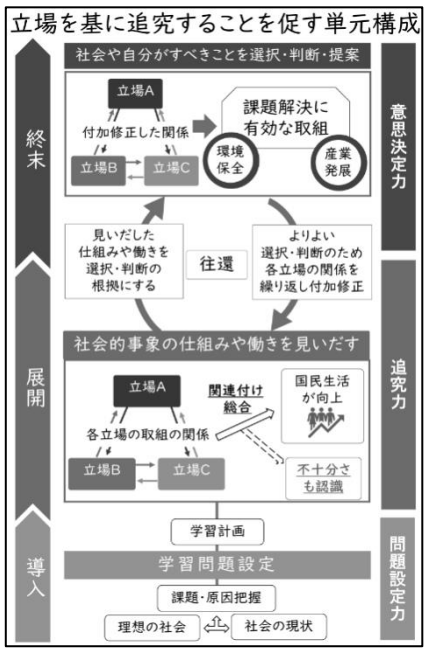


図２　立場を基に追究することを促す単元構成

(3) 仮説実証のための着眼

ア　単元構成を支えるための教材化の条件

単元構成を支えるための教材化の条件は、切実性、持続可能性、多様性の３つである。

イ　資料化の条件

導入段階の資料は、理想と現状の比較から課題が明確になるもの、展開段階の資料は、多様な立場の取組や関係、国民生活との関連が見えるもの、終末段階の資料は、環境保全と産業発展の両方を満たす取組が見えるものという条件である(表)。

表　３つの着眼(イ～エ)について

	各段階のねらい	資料化の条件	GT活用の条件	班編成の条件
終末	問題の解決のために、様々な立場から選択・判断、提案する。	環境保全と産業発展の両方を満たす取組が見えるもの	新しい視点を与えられること	異質グループ 考えを広げたり共通点を見つけたりする時
展開	社会的事象の仕組みや働きを見いだす。	多様な立場の取組や関係、国民生活との関連が見えるもの	他の立場との関連により仕組みを形成していること	同質グループ 考えを強化する時
導入	持続可能な社会を構想するための学習問題を設定する。	理想と現状の比較から課題が明確になるもの	切実な思い、解決への求めがあること	

ウ　GT 活用の条件

導入段階では、解決への切実な思いをもち、解決策を求めている人物、展開段階では、他の立場との関連により仕組みを形成している人物、終末段階では、新しい視点を与えられる人物を活用する(表)。

エ　交流における班編成の条件

展開段階と終末段階では、共通点を見つける場合に立場による異質グループを編成する。考えの強化の場合には、立場による同質グループを編成する(表)。このように、資料、GT、班編成を段階に応じて意図的に設定することで、社会的事象の仕組みや働きの捉え、有効だと考える立場や取組の選択・判断、提案を促すことができると考える。

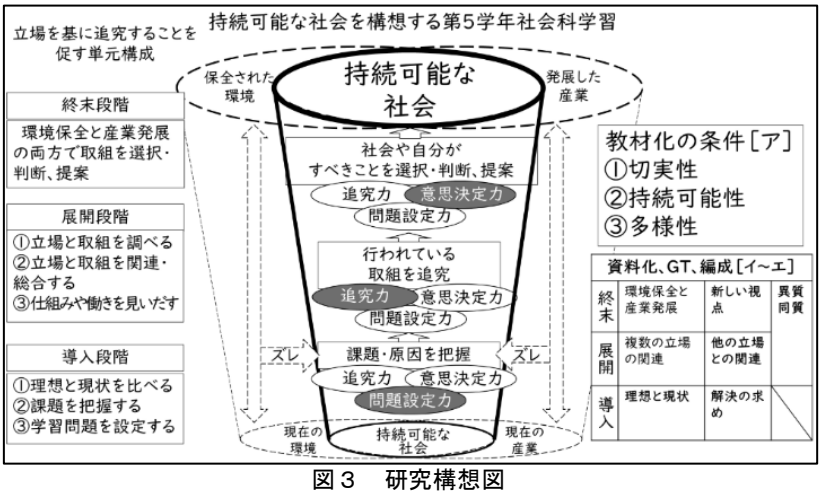


図３　研究構想図

(4) 指導の実際（10 月実証）

ア　小単元名　第５学年「どうする？情報活用～目指せ　持続可能な交通機関～」

イ　小単元の目標

○　日本の交通サービスの理想と現状を比較することを通して、情報活用の不十分さを捉え、その課題を解決するための学習問題を設定することができる。（問題設定力）

○　西鉄が情報を活用した「my route」や「のるーと」を導入することで、環境保全や交通の発展を進め、利用者の利便性向上への役割を果たしていることを捉えることができる。（追究力）

○　西鉄側と利用者側という立場から、環境保全と交通発展という課題を解決するために、有効だと考えられる情報活用の方法を選択・判断した上で、提案することができる。（意思決定力）

ウ　計画（全 10 時間）

(ｱ) 公共交通機関に見られる課題を調べ、学習問題を設定し学習計画を立てる。――――― ３時間

(ｲ) 情報を活用した交通業の営みを調べ、情報活用と交通発展の関連について話し合う。― ５時間

(ｳ) 交通業における課題を解決するためにすべきことについて話し合う。――――――― ２時間

エ　小単元の仮説

第５学年小単元「どうする？情報活用～目指せ　持続可能な交通機関～」の学習において次の手立てを行えば、持続可能な社会を構想する子供が育つであろう。

○　情報活用における理想と現状の資料［**着眼イ**］

○　終末段階での企業側からの立場として新しい視点を提示する GT の活用［**着眼ウ**］

○　自身の提案内容についての自己評価が異なる異質グループの編成［**着眼エ**］

オ　指導の実際

本小単元では、「日本を便利にするためにどう情報を活用するか」という課題を見いだし、交通業での取組を追究し、環境保全、利便性向上に繋がる取組を選択・判断して、提案することをねらいとした。切実性、持続可能性、多様性の条件を満たす教材として、西鉄の「のるーと」を扱った［**着眼ア**］。

(ｱ) 導入段階（１／10 時間）

導入段階では、「未来の日本をもっと便利にするために、どのように情報を活用すればいいか」という持続可能な社会に繋がる課題を踏まえた学習問題を設定することをねらいとした。そのために、まず、「society5.0」に関する動画を提示した。その後、情報活用力のランキングから、日本が 63 か国中 29 位であることを提示した［**着眼イ**］。すると、A児は「なぜ日本は順位が低いのか。」「未来の日本はどうすればいいのか。」といった問いをもった。そこで、交通サービスにおいて AI やビッグデータを活用してサービス向上を目指している西鉄から GT を選定し、「情報活用することで、よりよい交通サービスにするためのアイデアを求めている」というメッセージを提示すると、A児は「デジタル情報を活用しもっと便利にするために、自分たちにできることは何だろうか。」と発言していた。

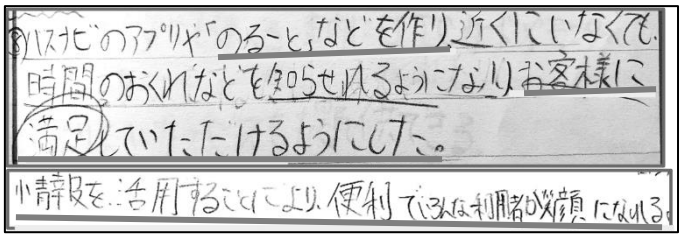
考察１

導入段階で、学習問題につながる理想に関する事実と現状に関する事実を提示したことは、問いを見いだす上で有効であったといえる［**着眼イ**］。これは 74 名の児童のうち、59 名（約 80％）が３個以上の問いをもつことができたことから分かる。また、GT によって、課題解決に子供が関わる余地があることを示してもらったことは、持続可能な社会を構想するための課題を踏まえた学習問題を設定することに有効であったといえる。これは 74 名の児童のうち、60 名（約 81％）が「何かできることはないか」といった課題の解決に向けた考えをもっていたことから分かる。

(ｲ) 展開段階（７／10 時間）

展開段階では、西鉄が情報を活用した「my route」や「のるーと」という新しいサービスを導入することで、環境保全や交通発展を進め、利用者の利便性向上への役割を果たしていることを捉えることをねらいとした。そのために、まず、西鉄が行っている交通サービスの内容や利用者への影響が分かる資料を提示したり［**着眼イ**］、GT により、具体的なサービスのメリットや課題についても情報提

供してもらったりした［**着眼ウ**］。すると、「AIなどの情報を活用してサービスを行っている」ことや「のるーとという新しいサービスは利用者にとって便利だ」ということを捉えていた。その後、情報活用前後でのサービスについて比較する活動を行い、A児は「情報を活用することで、利用者が便利で笑顔になってよりよい生活をすることができる。」という資料１のような記述をしていた。



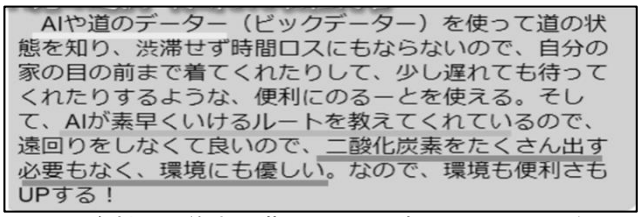
資料１　展開段階における情報活用の役割を捉えた姿

考察２

展開段階で、西鉄が「のるーと」を活用する前後を比較する中で、「のるーと」の変化と関連付けて国民生活の向上が見えるような資料を提示したことは、情報を活用する意味を捉える上で有効であったと言える［**着眼イ**］。これは74名の児童のうち61名(約82%)が情報活用と国民生活を結び付けて情報の有効性を記述していたことから分かる。また、GTにより、「のるーと」の詳しい説明をしてもらう機会を設定したことは、「のるーと」の仕組みを捉える上で有効であったと考える［**着眼ウ**］。これは74名の児童のうち、63名(約85%)が「のるーと」のメリットを記述していたことから分かる。

(ｳ) 終末段階（９／10時間）

終末段階では、西鉄側と利用者側という立場から、環境保全と交通発展という課題を解決するために、有効だと考えられる情報活用の方法を選択・判断した上で、提案することをねらいとした。そのために、まず、事前に作成していた提案書に対する見直しポイントをGTから提示してもらった［**着眼ウ**］。そして自身の提案書に対し、「利便性」と「環境保全」の比率について自己評価を行った。すると、ほとんどの児童が利便性(産業発展)の視点に偏った提案をしていることに気付いた。さらに、課題を解決するための取組を調べるための資料を提示した［**着眼イ**］。すると、A児は資料２のように「環境保全」「利便性」の両方を満たした取組を提案書に記述することができた。



資料２　終末段階における選択・判断した取組

考察３

終末段階で、GTによる新しい視点の提示を行ったことは、利用者にとっての利便性向上だけでなく、西鉄にとっての環境保全の視点も満たす必要があることに気付くために有効であった［**着眼ウ**］。これは74名の児童のうち、72名(約97%)が提案書を修正した際に「環境保全」の視点を入れていたことから分かる。また、「のるーと」をよりよいサービスにするために、有効な情報活用方法が分かる資料提示をしたことは、「のるーと」の利便性と環境保全の両面を満たした情報活用方法を選択・判断するために有効であったと考える［**着眼イ**］。それは、74名の児童のうち、60名(約81%)が、「環境保全」「利便性向上」という２つの要素を満たした取組を資料２のように選択・判断していたことから分かる。一方、約19%の児童は、交通業をよりよいサービスにするための方法として、２つの要素を満たすことができていなかった。

カ　全体考察

終末段階の子供の記述等から、約81%の子供が持続可能な社会を構想できたことが分かった。この姿が表れたのは、追究してきた立場や視点が増えたからだと考える。有効だったのは、GTを新たな視点の提示役として活用し、教師がそれに合った資料提示をしたことだと考える。この２つにより、導入段階では、利便性向上という利用者側の立場に立った考えしかもっていなかった子供が、終末段階では、環境保全という西鉄側の立場にも立ち、両方のバランスを考えながら取組を選択・判断するようになった。一方、班編成においては、異質グループでの交流が有効であると考えたものの、考えの出し合いに終わり、子供たちが立場を基に追究することを促すまでには至らなかったので、話合いの目的・内容・方法を明確にして子供と共有していくことが必要だと考える。

(5) 指導の実際（12 月実証）

ア　小単元名　第５学年「どうする！？森林保全」

イ　小単元の目標

○　森林保全を進めるための学習問題を設定することができる。（問題設定力）

○　様々な立場により保全された森林がもつ、国土保全等における役割を捉えられる。（追究力）

○　森林保全のために、社会や自分のすべきことを選択・判断し、提案できる。（意思決定力）

ウ　計画（全 10 時間）

(ｱ) 森林保全の理想と現状から課題を見いだし、学習問題を設定し学習計画を立てる。── ３時間

(ｲ) 森林保全に関わる人々の取組を調べ、森林の役割について話し合う。──────── ５時間

(ｳ) 森林保全における課題を解決するためにすべきことについて話し合う。──────── ２時間

エ　小単元の仮説

第５学年小単元「どうする！？森林保全」の学習において次の手立てを行えば、持続可能な社会を構想する子供が育つであろう。

○　森林保全における理想と現状の資料［**着眼イ**］

○　終末段階での林業発展という新しい視点を提示する GT の活用［**着眼ウ**］

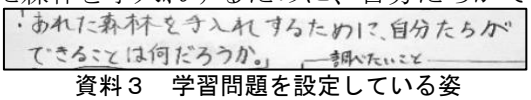
○　提案における選択した立場が異なる異質グループの編成［**着眼エ**］

オ　指導の実際

本小単元では、「これからの森林を保全していくために、自分や他の立場から何をすればよいか」という学習問題を設定し、森林に関わる人々の取組を追究する上で、環境保全にも林業発展にも繋がる取組を選択・判断して、それを推進する立場（市民、行政、森林組合）に提案することをねらいとした。

(ｱ) 導入段階（１／10 時間）

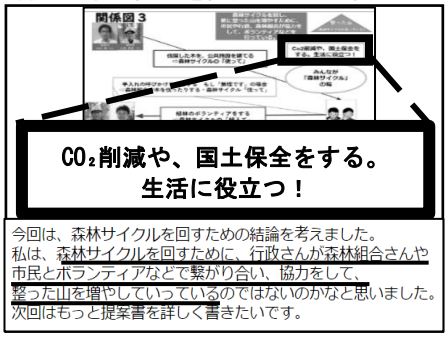
導入段階では、「これからの森林を保全するために、自分や他の立場から何をすればよいか」という持続可能な社会に繋がる学習問題の設定をねらいとした。そのために、まず、森林の働きに関する資料を提示した。次に、国内や福岡市の森林の割合に関する資料を提示した。その後、福岡市の森林における荒廃森林の割合とその整備に約 30 年かかることを提示した［**着眼イ**］。すると、Ｂ児は「どうしたら荒れた森林が整うか。」「自分にできることは。」という疑問をもった。そこで、福岡市の森づくり推進課の中村さんからの「森林保全に関してアイデアを求めている」というメッセージを提示した。その後中心となる問いについて話し合うと、Ｂ児は「あれた森林を手入れするために、自分たちができることは何だろうか。」と記述していた（資料３）。



資料３　学習問題を設定している姿

考察１

導入段階で、森林の働きと生活の関連を捉え、森林保全の理想と現状を提示した上で、GT により課題解決に関わる余地があることを提示したことは、自分事として解決方法を考えるという問題設定に有効であったといえる［**着眼イ**］［**着眼ウ**］。これは資料３のような記述ができていたことから分かる。



資料４　森林保全の仕組みを捉えた姿

(ｲ) 展開段階（７／10 時間）

展開段階では、市民、行政、森林組合の３つの立場が関係し森林保全をしている仕組み、森林がもつ国土保全や国民生活の向上への役割を見いだすことをねらいとした。そのために、市民、森林組合、行政の順に、取組内容や関係が分かる資料を提示したり［**着眼イ**］、森林見学に行き、GT から具体的な様子について情報をもらったりして［**着眼ウ**］、関係図や提案書を付加、修正する活動を設定した。関係図や提案書を作成する際には、同じ立場を選択している同質グループでの話合い［**着眼エ**］も設定した。すると、Ｂ児は「森林は３つの立場が関わり合って保全されている。その森林によって CO_2 削減や国土保全をして生活に役立っている。」と記述していた（資料４）。

考察２

展開段階で、各立場の取組や関係が分かる資料提示［**着眼イ**］、GT の情報提供［**着眼ウ**］、同質での話合い［**着眼エ**］による関係図や提案書の付加、修正を行ったことは、森林保全の仕組みや働きを見いだす上で有効であったと言える。これは、資料４のように各立場の関係を基に、森林が保全され、その森林により国土保全や国民生活向上に繋がっていることを記述していたことから分かる。

(ｳ) 終末段階（９／10 時間）

終末段階では、環境保全と林業発展の両方を満たす取組や立場を選択・判断し、提案することをねらいとした。そのために、まず、「森林サイクルを回し続けること（林業発展）」の重要性を GT に提示してもらった［**着眼ウ**］。さらにそのポイント（環境保全と林業発展）に繋がる取組を調べる資料の見直しの時間を設定した［**着眼イ**］。

（　行政　）の方へ
私は、行政の方があれた森林を整備したときに得た木材で木のスプーンやコップを作り、さらに最近の木は燃えにくいということも伝えたらいいと思います。理由は、燃えにくいということを伝え、買う人が増えたら、そのような商品を作りたい！と思う人が増え、木材価格が向上し、森林組合の方や行政の方の利益が向上し、たくさん利益が出たら、働きたい！という思いが出る人が増えて、たくさんの人手で得たお金でハーベスタ等の機械を買うことが更にできるようになったら、森林保全もしやすくなるからです。根拠

資料５　終末段階における選択・判断した取組

その後、異質グループで共通点を見いだす話合い［**着眼エ**］や GT へ質問の場［**着眼ウ**］を設定した。すると、Ｂ児は資料５のように「環境保全」「林業発展」を満たした取組を提案書に記述した。

考察３

終末段階で、GT による新たな視点の提示［**着眼ウ**］、その具体的な取組が分かる資料の提示［**着眼イ**］、さらに立場の異なる異質グループでの話合い［**着眼エ**］で共通点を見いだせるようにしたことは、「森林サイクルを回す」という環境保全だけでなく、「回し続ける」という林業発展も満たす取組を選択・判断するために有効であった。これは、資料５の下線部のように、「木材価格向上、利益向上、働き手増加により森林保全がしやすくなる」という記述から分かる。

カ　全体考察

資料５のように、３つの立場の関係を根拠にして、環境保全と産業発展（林業発展）の２つを満たす取組を選択・判断、提案することができた子供が約 85％いた。これは、単元の学習が進む中で、関係している立場が増え、それぞれが関連しながら森林保全に携わっていることを捉えたからである。有効だったのは単元を通して、提案書を完成させるために関係図を付加、修正し、立場の関係を捉えてきたことである。また、終末段階において GT による「サイクルを回し続けること」の重要性（新たな視点）の提示やその具体的な取組が分かる資料提示があったことも有効であったと考える。一方、展開段階の時点で、環境保全だけでなく、産業発展（林業発展）の面からも考え、取組を選んでいる子供もいた。このことから、環境保全と産業発展の２つを満たすような考えを、年間を通して促す際、時期によって、単元内で２つを意識させるタイミングに違いをもたせる必要があると考える。

５　研究の成果と課題

(1) 成果

○　単元を通して、提案書を作る活動と関係図を作る活動を往還するように位置付けたことは、立場の役割や関連について捉えることを促し、追究力や意思決定力を育成するために有効であった。

○　GT による新たな視点の提示、立場が違う異質グループにおける交流を終末段階に位置付けたことは、環境保全と産業発展の２つを満たす取組を選択・判断、提案する上で有効であった。

○　理想と現状を比較できる資料を提示し、子供にも課題解決に関わる余地があることを GT に示してもらったことで、問題設定力の育成に有効であることが分かった。

(2) 課題

●　時期によって、単元内で環境保全と産業発展の両方を意識させるタイミングに違いをもたせる必要がある。（例　６月→終末段階、２月→展開段階）

６　研修を修了しての感想

理論と実践を往還し続ける中で、徐々に目指したい社会科像が見えてきました。子供の思考を考え、子供が社会に関わっていきたいと思えるような社会科の在り方を追究し続けていきたいと思います。

備　考　○　在籍校と電話番号　　宗像市立河東西小学校　　ＴＥＬ　（０９４０）３４－１２３３